滑稽即興

三

入遠 18
1810
3

堺彦

へ13 18/0 3

清稽昂奥噺巻之三

目次

丁髪結
松ふく風
平家蟹
かんぎん
好物
雪うて
もちや用心

滑稽昂奥噺 巻之三

町髪結

江戸本町へんの丁元丁雅と仕ようまて淺草ちくん
ぢくさんげい義まくまそむうくゆく人を見まバ髪
屋ちぐこの雅ゑよ黒紹のとんつさのをとりおびハ
をとる是代ハ玉ゑ髪ハきんくとハさるまのくろ
をけをいてあ白をゆけバなんでもゑ系ゆさと
をいゑ屋しごこのむをこで有よとゑ屋しろ
すぐごゑ屋うんおぢくあるゑうゑもありとをこし

あーをそやめよ〳〵又ゑ丁内を廻る
かくるゝの源七めイヤ〳〵よをやあいつゞ
あんを形りハせまいと仕まつる〜宗吉と
又とゝけてこいといひたくるばかーこゝり
ちつまをゆさてた髭をのそさをとりハイ
源七どんよちゞひこさりませね浮ませよ
うといふゝイヤ〳〵よんでハけつくこまる
であらふと丁雑をせいーゝ伝ふりそろ〳〵
ゆくまをるゞゆくさをハもとつの淵叶をれバ

ちを伝くのこらふ〳〵と又あいをも手ぜいゞをれハ
イヤ〳〵宗吉をつちり源七をよゞハイと伝ふ
ちつまをもつて丁雑髪結どん〳〵どろ〳〵いう
しゆるイヤ猿ゞしぬ歌あよ

松嶺乱

大こまふちりまづ〳〵ひあい〳〵の禿かん病しるゞ
吉弥菜をせんあゞーをふやけとして菜漬を
知をとし菜をこゝぶーゝこぶれとそういゝだ
ちうつまる紙屋ちうハ菜をあう拵てれゞやと

浮世るぜひおく志づかはよむうひとごとのきまんの
くもりをかしてるもといふ者高はやつそうる
病が屋ちくしやよりて業ぐちがてある
吉原そ重でもおこ者さえハひとりどや

平家がに

橋のうくを通る人持る扇をハの中へ入をとし
て南無三ぶうとハけをうてえれバよ
私ぢが恋ひあげているヨイくをあるさハ
ちまが落しるのじやどもそうひとくして

下さまとハいた私ぢうのどよ濡て寒さふるて
ゐろうさしやをどんるハ者ねるいとハ角私ハ
ちるふりすぐるをとしる男ハせんるさ者ゐを
ふくそ立くるせんどうハかの扇を私ちりよ
かしてをきゐろげて張をえんとおりくハどち
ぢいそあるゐバ肩よまるよのセテモ独ぐハこ恋ん
ぢじや

郭

大坂平野町くんの豪家くん伏見町丸辺田屋

きのうりしられバ五人いつゝ八伝と正田唐へ
かんさうの枕の注文ハ世ゝまいらの正田ハ一陸
ゑりてハ世さされまするゞ伝の拾ハしまもう人サア
ささそう皇帝の奪ゝ文てうめいの書ハいつも
あまどかんさうの枕ハ日本へまゝゞ注ゞさ
うねどうぞ注文がてのゝバ毎日又十年の義を
アるけうへもあいたのしゝおくるゞ大正中
あいうのあつゝ正田もらいまつけあとさつそく
老僧へ状通してを年の唐航よいひ拾ゝ年

吟味して指さる筠朱おれど唐でもあふく
いゝ一ゝ年延りしてゝゝ巳年ゝふ注文
そのひ大坂へくるやいな正田ゝ注そく拾系
五人へ言金の拾さゝあそけつゝゝおゝさでも
あろうとゝひのゝうるでぬつゝ草まゝゞ
伝千伝百年まるゝけしくねむしてそ
かろくしてゝ世バどゝ世ゝ元治ゞ用利者で
アんせるよたゞかんさうの市であるのゝ
ムゝゝゝゝの身代の草まゝゞねゝ

であろうといわるゆゑ人大ふよろこひなん
でも五ぶいゆをりをとるまへさまづてろうよ
様て見ゆうと百つうしよ度をとるせけ枕を
して祈り進るゑ蓋ともあくうつともあく
ゑ分ハそぜんかどうよあつて鉢々まきんさいも
を食してゐるとゑて角次第ゑ定大きう
あり自性ようあひあるいて見ばすさはじい
大木ようえんでゐるをよくくゑへばゑ分ゑちい
さいうゑて作山よをひしハちさの素のすまい

どうあゑゑ分ハあむしよまきうつさゑ
ゑ時ハゑ時のゑよあつて鉢々鉢をすひ菜の
素をとうあたのしゑ比しも三月のあてうある
日素おりてよひあるさかうしている内うぜよ
さてゑ進て分中ゑかうあつゑゆゑ人ゑハ
ふうぎとえんへ進ばいつの石ふゆうかむしゑ怖よ
角んじそうあうりのあうゑ畑うむさ鼠
塀のゑハいちのゑ垣根のきしゑゆのうけいづく
さうあゑ寸蕊めぐるおりろさわしも喉ゑかとけバ

花の佐西を人と山吹のうぐく咲めぐる西へ十二三
あ如乃子がちらつてさて扇でぴつしやりちらと
ちらそて姿がさめてとんとかてんゆうぎ五十年の学
花のゆめを見るちらつやがとちらくあんじて
ちらや荘子が枕と乃ちらてハかいうちらね

好物

あ子さハ小多ぢうがハ子ねうと有ますれバ什品
河原をお例ひ奇ぶれてござるげなるちらハたい
よ見まちさ子がこさうませね伺ととそ物ん致ちう

あゞ寿それハちあいとハ目ようげませう刈
こ生が河原てござりまを世乃で多く社会河
原と二種ござ生ど什雄の方ハなく高がいうて
清亮よござる也河の原と中公でかゞと中寿
下社ハとうく小多るよかゞ原玉雄のたゞひ伺
でもなくあがきつい好物でこさると以ハ客いうち反
さ生うちうよござりますといひく内年の
顔を

彫猪

奥の間の侍あるよ仲居がかへりまして
おやすみなされませといへば侍ハ嵐が大きん
めつぢやなるよりハ家よりもたいそうな
嵐が出おろよりハ外ハ後へこねやうよたのむと
いへば仲居ハうてをとりますこたがをやうよおつ
しやつてもたいへんなのまへでハどうなされまを
待あんのく乱世の時ハ何方といふ大軍の中へ
一人ハいてをぐるをあるうまをそをぼし嵐こそ
きうひあれ人ハこのやうなたよいやつでも何とも

あんとをそれをいつて女命と称まへ入家内も
絵つきのうるびまるもやもすざうしうごろ
ばりの志のび居る盗人時ハのとそなる
かり強まへこちくと言る家内ハ間へさまヤレ
盗人よくくと大声よてまくに盗賊ハ驚し
てあけうるおやま鼠奥より出てあてあ白ゴロく
ませんといふる表角おどろきあうこたづぬまハ
極の下よりでこ居る時くヤりくそう盗人ハふげ
まりこうくお出なされまのせといへハ侍ハをち付

何もこゝまいで月出さいく家内おうーく
騒よおつしやつさおゆとハ遠ひ遊人をきつゝ
こゝぐりおさるおアゆ侍そ生ハをもづ遊紙ハ金の
孫づゝといつゝさ

をもや用心

先生お富ふ金ヲ、見ハ花タるよお出行と見ふ
ておつゝおさまつさイヤ先生今日ハ天氣もよし
花もさくりおれだ位いつゝませうと存じて
見ハ〳〵ほんせつかるゝけおい私ハ何ゝも

拙ふハ絵ゝりませ見ハ又お好のゝ何と
絵ゝてイヤモ去年中ハ何のものも絵りほし
さがつくおゆハこゝゝおんるゝ天主もうゝ何て
堀へ巻物よ絵つゝて何ゝ泥へたまりおんさ
いつゝまつゝそれゝ髮切おゝゝ見ゝ実よ
まいつて見もゝ山見よふゝまゝのひめいゝく
いつゝ月見よ絵ハ云ゝんる西へゝけゝむ
孫絵見ふゆゝバ時およあそ云ゝぬまよ
なゝ巻ゝよゆゝバすべりゝけるゝでもれも

しろ風呂をたくさんそなへまをれバやうが
ふたをするとぞんじそれ〳〵そんとくやうよ
花タ何をおつしやるそれハ沸
りませぬかマア今夏ハおいで
なさいませ〳〵やぜひにとも
〳〵ふ段そなへひとつと
うるん

4年 月
十一

滑稽昴奥噺巻之三終

しろ風呂をたくさんそろへまをれがわるぐ
ふたをさるとぞんじそれくるとうとくやめよ
段しまくてい花タ何をおつしやるそれハ湯
時のまんでうるおござりませうマア今日ハおいで
おされ花ふハけがのあい物じやぜひれとも
いくらまをしイヤくよふ段そひろと
馬でもそろそろさるん

滑稽昂奥噺巻之三終